

1 集落活動センターの 立ち上げに向けた手順(基本的な流れ)



2 | 集落活動センターの立ち上げに向けた手順(具体例)

STEP 1 立ち上げの検討

- ① 地区長や住民からの要望に応じて、市町村が地区会などでヒアリングを行い対応を検討
- ② 市町村が地域の現状把握
(地域のまとまり状況やリーダー役の存在など)
- ③ 市町村と住民が協議(意向確認)

地域の課題のを見つけ方は、
情報収集 → 整理・分析 → 課題の抽出

STEP 2 地域ビジョン作成

- ① 地域リーダーや市町村、関係機関が協議し、地域の課題や将来像を検討
- ② 活動内容のアイデア出し
- ③ 住民座談会やワークショップを通じて、地域の課題や将来像の整理・共有(座談会などでは、市町村・地域支援企画員^{※1}・地域おこし協力隊・集落支援員などがサポートを行う)
- ④ 住民の合意形成(集落総会などで総意確認)

POINT

座談会やワークショップでは地区長の参加は必須。また、地区ごとに細かく開催するなど、一人ひとりの声を聞くことで、集落全体でのビジョン共有がスムーズになり、人材の発掘にもつながる。

香南市西川地区 西川地区集落活動センター <住民活動からセンターへ発展>

H7年～ 住民が直販所の運営や西川花公園の整備などで交流活動を実施

H14年～ 住民が運動会や夏祭りなどのイベント、高齢者世帯を対象にした粗大ゴミ回収などを実施

H24年度(上半期) 住民グループが中心となり、集落活動センター設置に向けた準備会を立ち上げ、ワークショップを実施

● ワークショップ：計8回(H24.8～H25.3)

ファシリテーター^{※2}は香南市職員

黒潮町北郷地区 集落活動センター北郷 <小学校休校をきっかけに地域で議論>

H15年～ 北郷小学校休校

H18年～ 住民による地域イベント「納涼祭」の開催

H20年度 3地域の住民が集まり、北郷地区の地域づくり計画「小学校の幸せな使い方」を作成

● ワークショップ：計5回(H20.12～H21.3)

H21～23年 施設の整備や特産品づくり、交流イベントの開催に着手

H24年2月 北郷地区協議会が発足。「北郷小学校の幸せな使い方計画」を作成

アドバイザー制度を活用

佐川町尾川地区 集落活動センターたいこ岩 <地域の危機感を行政と共有>

H21年～ 地域からの要望に基づき、役場内で尾川地区の交流施設の活用促進を検討

H22年 住民から施設改修の要望

H22年度 地域リーダーと町が協議し、地域ビジョン策定を合意

H23年度 行政と協働で将来ビジョン「尾川地区事業計画」を策定

● ワークショップ：計5回
ミニシンポジウム：計1回(H23.9～H24.2)

※1) 地域支援企画員とは：主に各市町村役場に駐在している県の職員で、市町村と連携しながら、地域の振興や活性化に向けた取り組みを支援しています
 ※2) ファシリテーターとは：会議や研修を目的のゴールに導く進行役のこと。参加者に発言を促し、流れを取りまとめる役割がある

※ は、集落活動センター推進事業費補助金の要件

STEP 3 活動計画作成・開所準備

- ① 集落活動センターとしてどのような活動をするかなどの計画作成
(計画作成にあたっては、市町村・地域支援企画員・地域おこし協力隊・集落支援員などが助言などを行う)
- ② 運営組織や拠点施設の検討
(体制や規約などの検討にあたっては、市町村・地域支援企画員・地域おこし協力隊・集落支援員などが助言などを行う)
- ③ 住民の合意形成(集落や運営組織の総会などで活動計画の周知・承認)

必要に応じて、STEP 2 やSTEP 3 で中山間地域振興アドバイザー制度の活用や研修会への参加を検討

STEP 4 開所

- ① 集落活動センターの開所
- ② それまでの話し合いなどの結果をもとに、市町村や県が地域に対する予算措置、支援体制などの決定

POINT

早い段階で地域おこし協力隊や集落支援員の導入・活用を検討する。
地域外人材は地域ビジョン策定段階での地域外の視点、新たなネットワークづくりのためにも有効。

H24年度(下半期) 準備会メンバーに各地区会から運営員を加え、集落活動センターの運営や活動についてさらに協議。各地区の7常会へ説明会を実施

H25年4月 西川地区集落活動センター推進協議会総会で活動計画などの承認

H25年4月開所
耕作放棄地での農産物栽培などの活動開始

H25年度
集落活動センター推進事業費補助金で公園整備や耕作放棄地の開墾などを実施
地域おこし協力隊1名導入(H25年6月着任)

H24年4月 北郷地区協議会で、北郷地区でのセンター設置を合意。役員を決定し、活動計画を承認

H24年6月～ 月1回の協議会を開催し、集落活動センターの具体的な運営などを検討

H24年9月～ 集落支援員導入の検討

H24年11月～ 集落活動センター推進アドバイザーから、類似の活動の優良事例を学ぶ

H25年3月開所
銭湯経営や特産品開発などの活動開始

H24年度
集落活動センター推進事業費補助金で旧北郷小学校を改修して拠点施設を整備
集落支援員1名導入(H25年3月着任)

H24年8月 尾川活性化協議会役員会開催

H24年9月～ 総会でビジョンと集落活動センター設置を承認

H24年10月～ 集落活動センターの活動計画を検討

H25年4月 地区総会で計画の承認。地域おこし協力隊の導入を検討

H25年10月開所
高齢者への配食サービスを活用した見守り活動の開始

H25年度
集落活動センター推進事業費補助金で地域交流施設を拠点施設として改修
地域おこし協力隊1名導入(H26年5月着任)

3 | 立ち上げ検討のきっかけ

これまでの事例では、例えば次のようなことをきっかけに集落活動センターの立ち上げの検討が始まっています。きっかけが住民発であっても行政発であっても、その後は住民と行政が一緒になって話し合いを進めていきます。

住民発

- 1 地域のリーダーが、市町村の担当者に悩み(地域の課題)を相談した。
- 2 住民から、「直販所を改修して、地域の活性化に取り組みたい」と役場に相談した。

協働

- 3 地域おこし協力隊からの提案をきっかけに、地域で話し合いの場がもたれた。
- 4 集落営農組織や食生活改善グループなど既存の活動組織に、行政から情報提供があった。
- 5 市町村の広報誌を通じて情報提供があり、やってみようと考えた地域で協議が始まった。

行政発

- 6 行政から住民代表者に、集落活動センター立ち上げの提案が行われた。
- 7 行政から地区長に、地域の現状分析により見えた課題について説明が行われた。
- 8 知事や市町村長と住民との座談会が開催され、そこで情報提供が行われた。
- 9 行政が、地域のキーパーソンに事前相談をしたうえで地域の現状や課題などについての住民勉強会を開催。そこで支援制度の説明とあわせて住民に提案が行われた。
- 10 「キーパーソンがいる」「話し合いの場がある」など入りやすい地域から、行政が説明会を行った。

4 | 話し合いによる地域ビジョンの作成手法

どのような集落活動センターにしたいか、どのような活動に取り組みたいかを考えていくにあたっては、地域の将来像を住民みんなで描くことが鍵となります。自分たちの地域の状況などにあった手法を選択しましょう。

方法① 既存資料の活用と現地調査の組み合わせタイプ

- ① 地図、統計データ、文献などを参考に地域概況をまとめる
- ② 実際に現地を調査し、情報を補足していく
- ③ 結果を地図と文章で表現
- ④ 活用のアイデア出しと優先順位づけ



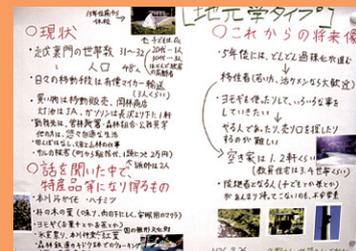
方法② 集落点検タイプ

- ① 課題の抽出
ヒアリング項目を設定し、住民にヒアリング。客観的な意見を住民の代表者にヒアリングする際は、定量化※1できる聞き方にする。ヒアリングに基づき、生業、暮らし、後継者など、多方面にわたって把握
- ② 分類
ワークショップ形式(KJ法※2やSWOT分析※3など)実施
- ③ 対応策のアイデア出しと優先順位づけ



方法③ 地元学タイプ

- ① 地元の方による現地案内と対話
見聞きしたありのままを記録する。
※ どのような方向に話が進むかわからない
※ 問題意識(先入観)を持ち込むのではなく、人の心に寄り添う姿勢に立つ
※ 聞き手のセンスが重要になる
- ② 絵地図の作成
人の知恵や技の凄いところを見だし、模造紙に落とし込み、可視化



地域の「得意」や誇りに思っている「宝物」などを、住民に改めて発見、自覚してもらうことが成功の秘訣

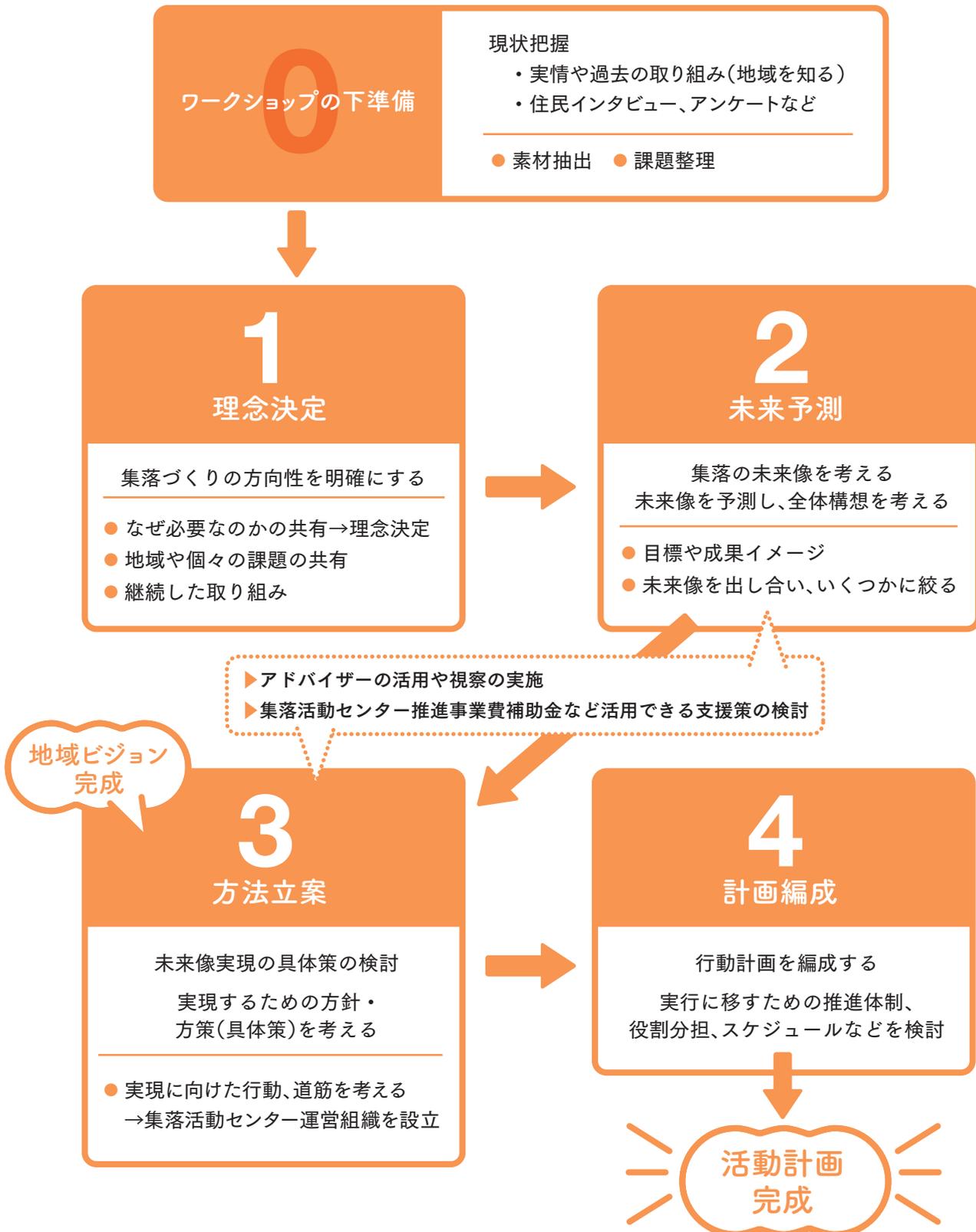
※1) 定量化：質的にしか表せないと考えられている物事を数値で表すこと

※2) KJ法：データをカードに記述し、グループごと分類することによりデータをまとめていく方法

※3) SWOT分析：強み(Strengths)、弱み(Weaknesses)、機会(Opportunities)、脅威(Threats)の4つで現状を分析する方法

5 | ワークショップの進め方

ワークショップを進める際は、全体構成を考えたうえで、各回の内容や進め方を考えましょう。
計画どおり進まなかった場合は、その都度、計画を見直しましょう。



6 | ワークショップの手法と手順（事例）

土佐町石原地区で行われたワークショップの過程を紹介します。

内容

振り返って

地域の課題

まずは「課題出し」から始めた。地域の課題を出し合い、付箋に記入。「緊急度が高い／低い」「難易度が高い／低い」で分類する。

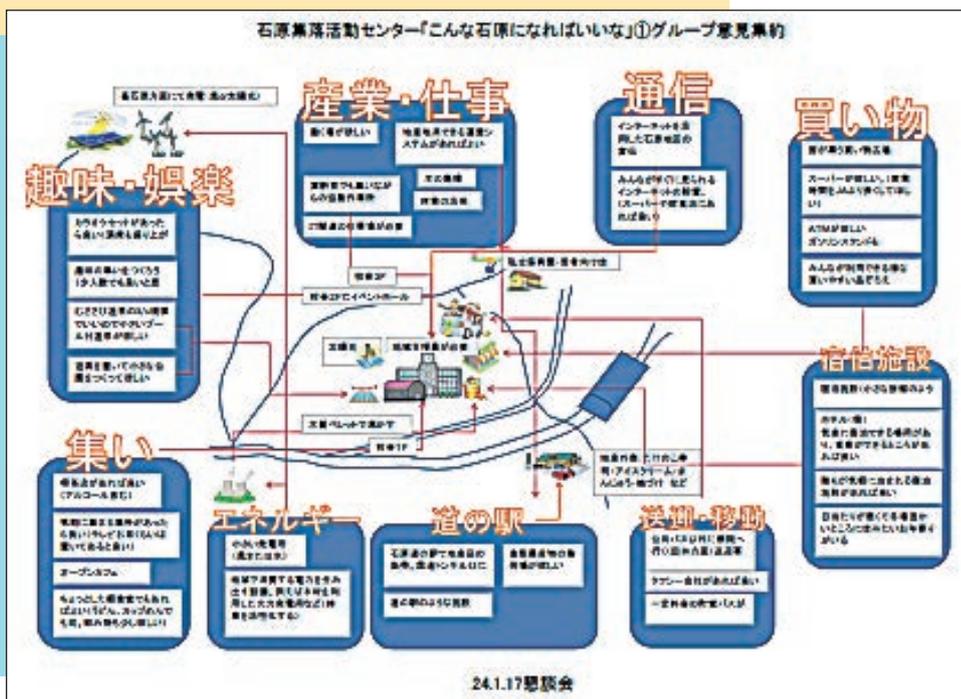
- 一般論的な意見が多く、本音が見えにくい。
- 活発な議論ではなく、“楽しさ”がない。
- 後に続かないと判断し、方向性を変更することにした。
- 制約条件を無視したことで、個人的意見を含めているような案が出た。
- 「会の案内文書」を配布したことはなく、クチコミで参加者を募った。

緊急度高・難易度易	緊急度高・難易度難	緊急度低・難易度易	緊急度低・難易度難
独居老人が増加しつつあり、買物・通院等に不便がある	結婚をしない人が多い	高知市内へ出るのにバスしかないがバス代が高い	一次産業の衰退、基幹産業の開拓
病院に行くにもバス停まで出れない人がいる	若い人がいない。活気をつけるには若い世代も必要。	保育を含めた学校や高齢者の送迎がないのでそれに時間をとられてしまう	不在土地所有者が増加して林地崩壊の箇所が増加している。
高齢で一人暮らし等の足の人がない。	次世代を担うリーダーの育成が必要。	話し相手がすくなくなってきた	集落に子どもが少ない
年寄りが多い物に行くのに遠い	耕作放棄地の拡大。耕作をしたい人が育てばいいなと思う	飲み屋がない	居酒屋がない
バス便が少ない	野菜や果物の収穫を手伝ってほしい	気楽に寄り合い・話し合いの場所がない	喫茶店に当たったら
世代交流が少ない(男女間も含む)	林業が活性化していない	ちょこっと飲む場所がない	高みね神社の祭りの維持が困難になっている
一人暮らしの老人の外出がなくなっている	農業の収入が少なく生活が厳しい(林業も同様)	若者の集う場所がない	旧石原小学校は3階建てなのでエレベーターが必要になるのでは
見守り活動・告知放送JA郵便局	木材が売れてほしい	石原小が廃校になり、地域の方と子供との交流がなくなった	小水力発電でもうけよう
一人暮らしの方で食事等支援を必要としている	豪石原は直販の荷物を作っても出荷ができない(車に乗れない為)	共同生活できる場所があればよい	温泉をほろう
老人施設にすぐに入れない	木材単価が安い	お年寄りがATM使えない	何をしても同じメンバー
老人の共同炊飯・共同生活(ホームみたいな)	山が動かん	ATM使うとき一緒におってくれる人が必要	町営住宅に給料が安い人はいないのはなぜ?
町内でお金を回さないかん	木材・米価の価格が下落し、生活が苦しくなりつつある	便利屋がいたら良い	人がとどまれるようにしたい

理想の石原

- ① 何の制約条件もないと仮定して、「センターでやりたいこと」「あったらいいもの」を、付箋にできるだけ多く書く。
- ② 付箋を模造紙に貼りながら、簡単にグループ化。
- ③ 模造紙の中心にセンターの絵を描き、それまでに出た意見を地図落とし込む。

- 絵を描きながら話すことで、ゲーム的な要素も入り、参加者に楽しんでもらえた。
- 前回出た意見をすべて取り上げたことで、「個々の意見をきちんと扱う雰囲気」ができた。
- 茶菓子などを持参するようにした(当初はファシリテーター側で用意していたが、地域の方が用意してくれるようになった)。
- 「理想のセンター像」をどう次につなげるかが見えていなかった。ファシリテーター側の3名で議論を重ねたがまとまらず、地域支援企画員が内容を預かり、一旦カテゴリー化を試みるようになった。
- 前回までの経過をまとめた資料を配布するようになった。



4つの柱

- ① 前回出た意見(付箋)を「集い」「働く・稼ぐ」「支える」「見つける・実現する」の4つの柱のもとにまとめ、樹形図を作成。
- ② 内容をひとつずつチェックしながら、それぞれの意見の位置づけや意味が正しく捉えられているか確認。

- 参加者が増え始めた。
- 青壮年世代の参加が増え始め、雰囲気が変わった。
- 「これを実現しよう」という声が聞こえるようになった。
- こちらが設定したカテゴリー分けを前提として議論が進まないよう、ファシリテーター側で意識共有をはかった。「この分け方でいいの」「この意見はこの意味でいいの」を、参加者に逐一確認した。
- 参加者の顔と名前が一致するようになり、会の合間に自宅を訪ねて話を聞くことも多かった。

「集い」	居酒屋・喫茶・食堂	- 居酒屋各つくる - みんなが集まって飲む所 - 土日限定の祭りのれん	- 地には新しい地域の変った表裏店	- オープンカフェ	- 医茶店があればよい(アルコル系) - 飲食店(医茶店とか)
	お年寄り、子ども	- 年寄りが集まる所 - 高齢者の集える場所	- どんからりんの家(小さい版、うどいの通)送迎あり	- 若人ホーム	山形管学受入
	公演・運動場など	- 遊具を置いて、小さな公園をつくってほしい	- 雨が降っても体が動かせるような室内運動場	フィットネス	
	ふらっと、気軽に。	- 気軽に集える場所があったらいい(テレビ、お茶ぐらいは置いてあると良い)	誰でもふらっと立ち寄れる場所	趣味の集い者をつくる。少人数でも良いと思う。	四季を通してイベント開催 羅北の小京都〜石巻
「稼ぐ」	温泉をほろう!	- 温泉をほろう!! - 温泉・プールを設置する		むさび温泉の1/3位の規模でいいの(小さい)プール付き温泉がほしい	
	「働く」	宿泊(民宿、ホテル)	- 宿泊施設があるといい(小さな旅館のようなもの) - 治まれる所	- 旧小学校をホテル - ホテル・民宿	ホテル(昔)営業にできる場所がある(国道沿い)がいい
	道の駅、直販(地産地消 地産外商)	- 道の駅のような施設 - 石巻の駅で特産品の販売、国道トンネル口に道の駅	トンネル口付近に良心中・直販所	国道に野菜等の販売所をつくる(むさびの例) ★住む人の忍力を生み出す	農産物の直販所を設置する(国道沿いに設置すればいいと思う)
	インターネットの活用	インターネットを活用して石巻地区の置換		みんながすぐにみられるインターネットの設置(スーパーや飲食店にあればいい)	
	集荷/出荷、加工	農産物の集荷場がほしい		野菜収穫加工、お寿司、酒粕まんじゅう	
	IT企業などの受入(ターン、Uターン受入)	IT関連の仕事場が必要	1の仕事受け入れ		空き家を利用して住む人を募る 若者達のカムフラクサーモン

支える

- ① 4つの柱をそれぞれ具体的に詰めていくことを決定。
- ② どれから検討するかを参加者に確認、検討しやすい「支える」から始めることに。
- ③ 小グループに分かれ、これまで出た意見をもとに、「どういものやっていくか」付箋に書き出し、議論。
- ④ 全体で内容を共有した後、いったん持ち帰り、次回までにA3、1枚に整理。
- ⑤ 前回の内容を確認後、まとめをホワイトボードに書き出して議論、5W1H*でさらに内容を具体化。
- ⑥ 最後に、「自分であればどの役割を担えるか」を各自投票。

*5W1Hとは：II章7(22p)参照

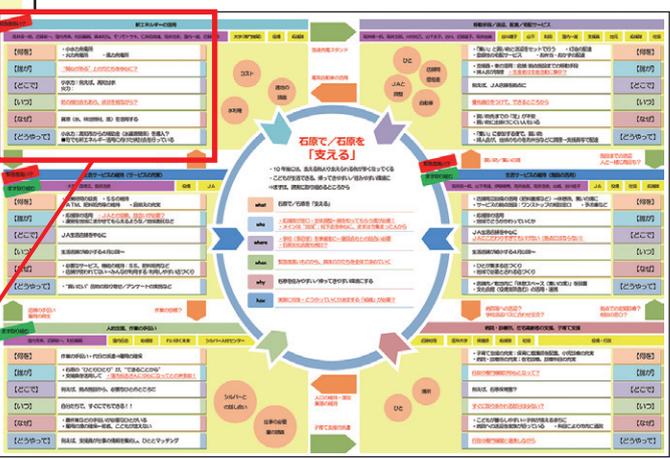
- 会の進み方の見通しが立ち、参加しやすくなった。
- ひとまずのゴールが見えた。
- 「組織化」や「調整役」の必要性が議論されるようになった。
- ワークショップの進め方が固まった。「意見出し」→「取りまとめ」→「確認」→「取りまとめた内容をもとに5W1Hで具体化」→「取りまとめ」→「確認」。以降、同じ段取りで進めた。
- 小グループで付箋などを使いながら意見を出し、ホワイトボードを使って全体で共有。
- 全体共有の際にトーキングオブジェクトを導入。ビニールボールを使い、それを持っている人が発言できる仕組み。話したい人にパスしつつ、意見を聞きたい人にもパスをまわす。場もやわらぎ、無口な人も比較的話してくれる。
- ファシリテーターは、「確認すべき論点」を事前に明確にして会に臨む。その打合せに時間を使う。

緊急度低い?

新エネルギーの活用

能井良一郎、近藤敏一、窪内秀幸、和田義嗣、森本和弘、モリモトサキ、仁井田尚輝、滝井浩史、窪内一輝、近藤裕包

【何を】	・小水力発電所 ・火力発電所 ・風力発電所
【誰が】	“関心がある”上の方たちを中心に?
【どこで】	小水力: 例えば、高知分水 火力:
【いつ】	町の検討会もあり、状況を見ながら?
【なぜ】	資源(水、林地残材、風)を活用する
【どうやって】	小水力: 高知市からの補助金(水資源開発)を導入? ■町でも新エネルギー活用に向けた検討会を行っている



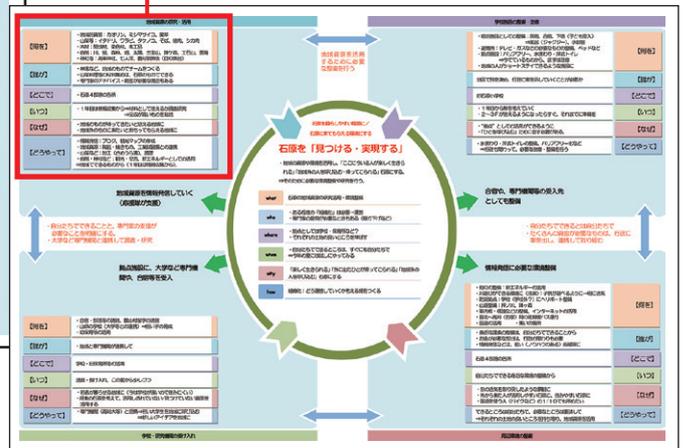
実現する

- ① 前回同様の手順で「実現する」の具体化と検討。
- ② 事前に「地域資源の研究・活用」「施設の整備・改修」「研究機関の受入」「周辺環境の整備」にカテゴリー分けをしたワークシートを用意し、意見出し。
- ③ 小グループでの議論後、全体共有。
- ④ 取りまとめ。
- ⑤ 取りまとめを確認し、5W1Hで具体化。

- マンネリ化を避けるため、グループ分けにゲーム的要素を加えるなど、遊び心を導入する。
- 5W1Hで具体化するが、過剰に細部にこだわらない。
- 意見が出にくい部分は、検討課題として、決めずにおく。
- 場が煮詰まったらブレイク。現場に出て実際に見てみる。



地域資源の研究・活用	
【何を】	<ul style="list-style-type: none"> ・地域的資源：カオリン、ミシマサイコ、薬草 ・山菜等：イタドリ、ワラビ、タケノコ、そば、猪肉、シカ肉 ・木材：間伐材、染色材、木工品 ・自然：川、虫、森林、畑、太陽、三宝山、陣ヶ森、工石山、雲海 ・神社等：高峯神社、七人塚、農村歌舞伎（回り舞台）
【誰か】	<ul style="list-style-type: none"> ・林家など、地域のものでチームをつくる ・山菜料理等の材料集めは、石原のものでできる ・専門家のアドバイス・助言が必要な場合もある
【どこで】	・石原4部落の各所
【いつ】	<ul style="list-style-type: none"> ・1年目は情報収集から⇒材料として使えるか調査研究 ⇒反収が高いものを栽培
【なぜ】	<ul style="list-style-type: none"> ・地域のもので帰ってきたいと思える地域に ・地域外のものに代たいとおもってもらえる地域に
【どうやって】	<ul style="list-style-type: none"> ・情報発信：ブログ、観光マップの作成 ・地域資源：陶芸、焼きもの、工業試験場との連携 ・山菜など：加工（さめうら濃）、調理 ・自然・神社など：観光・交流、新エネルギーとしての活用 ⇒地域でできるものから（1年目は情報収集から）、

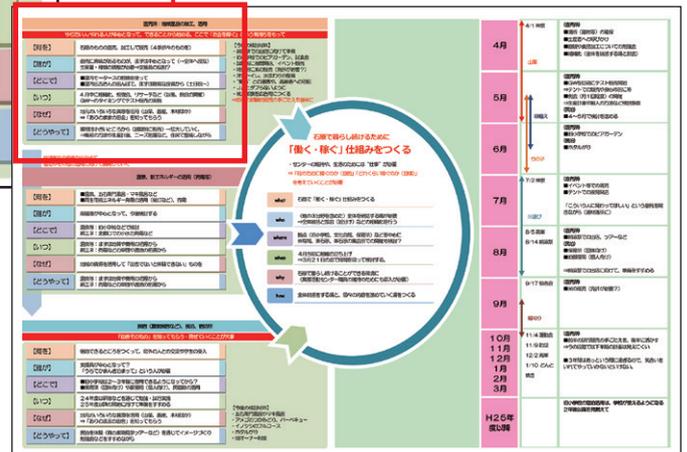


働く・稼ぐ

前回までと同様の手順で意見を出し合った後、時系列でH24年度の事業展開をイメージ。カレンダーにプロット。

- 「働く・稼ぐ」仕組みの具体化に向けて、スケジュール感が重要と提案。4月以降の活動計画のイメージをつかむ。その過程を通じ、5W1Hも明確にする。

直売所：地域産品の加工、活用	
やりたい人/やる人が中心となって、できることから始める。ここで「お金を稼ぐ」	
【何を】	石原のものの直売、加工して販売（4季折々のものを）
【誰か】	直売に興味があるものが、まずは中心となって（→全体へ波及）生産量・種類の調整が必要⇒支援員の役割？
【どこで】	<ul style="list-style-type: none"> ■ 窪内モータースの敷地を使って ■ 窪内伝吉さんの田んぼまで。まずは簡易な設備から（土日祝〜）
【いつ】	4月中に組織化、勉強会、リサーチなど（以後、例会の開催）GW〜のタイミングでテスト販売の実施
【なぜ】	<ul style="list-style-type: none"> ・地元のいろいろな資源を活用（山菜、畜産、木材ほか） ⇒「ありのままの田舎」を知ってもらう
【どうやって】	<ul style="list-style-type: none"> ・最初は小さいところから（試験的に販売）→拡大していく。 ⇒集荷の方法や生産計画、ニーズ把握など。住民で整備しながら

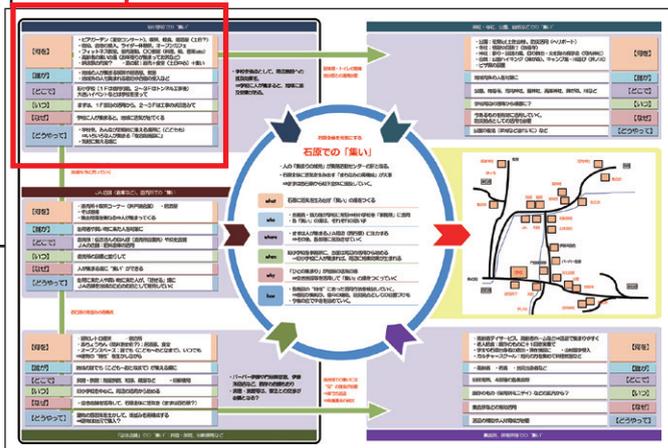


集い

前回までと同様の手順で意見を出し合った後、小グループごとに地域の地図を描いてもらい、「どこにどういう集いの場があるか」「どういうものがどこにあったらいいか」について検討する。

■「地域にはいろいろな集いの場がある」という参加者の発言から、その状況を把握しつつ、場づくりについて検討(「集い」には場が重要という判断)。

旧小学校での「集い」	
【何ぞ】	・ピアガーデン(星空コンサート)、喫茶、軽食、居酒屋(土日?) ・宿泊、合宿の受入、ライダー休憩所、オープンカフェ ・フィットネス教室、室内運動、〇〇教室(料理、絵、音楽 etc) ・高齢者の集いの場(お年寄りが集まってお茶など) ・納涼祭の充実? ・道の駅:直売+食堂(土日中心)+集い
【誰が】	・地域の人が集まる喫茶や居酒屋、教室 ・地域外の人も集まれる宿泊や合宿の受入など
【どこで】	旧小学校(1Fは使用可能、2~3Fはトンネル工事後) 大きいイベントなどは学校を使って
【いつ】	まずは、1F部分の活用から。2~3Fは工事の状況をみて
【なぜ】	学校に人が集まると、地域に活気が出てくる
【どうやって】	・学校を、みんなが定期的集える場所に(こどもも) ⇒いろいろな人が集まる「複合施設に」 ・気軽に集える場に



4つの柱を集約

- ① 「支える」「働く・稼ぐ」「実現する」「集い」の4つの柱を、見やすいように1枚に取りまとめ。
- ② それをもとに、全体の組織構成について検討し、「いしはらの里協議会」と、直販部・集い部・新エネルギー部・共同作業支援部の4部会を設置。ワークショップでの議論から、4部会と協議会の間にはいる機関として連絡会をおくことになった。
- ③ 最後に、センター名とキャッチフレーズを公募で決定した。

■ワークショップを通じ盛り上がった機運を、協議会組織化、その後の展開に結びつけ、立ち上げ後の活動がスムーズに。

■役員という形で役割が明確化されたため、ワークショップでの全員参加の雰囲気が少し弱まったかも知れない。



7 | ワークショップで出された意見のまとめ方

話し合いで出し合った意見やアイデアを実現するためには、どの意見を採用し実施するか、住民間での合意形成が必要になります。ここでは、アイデアの順位づけを通じた合意形成手法を紹介します。

- ① 各部会の代表者などが集まった会議で、5W1H(2H)で全体評価。
できそうなものから活動計画に反映させるよう、各部会では評価結果に基づく活動計画を作成。

When	いつ	Where	どこで	Who	誰が
What	何を	Why	なぜ	How(much)	どのように(いくらで)

- ② 出し合ったアイデアを、重要度・緊急度・難易度の3つの視点で5段階評価
合計点数が高いアイデアから実施

アイデア	重要度(本当に必要か)	緊急度(急いでやるべきか)	難易度(簡単にできるか)
	大 ← → 小	大 ← → 小	易しい ← → 難しい
	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1
	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1	5・4・3・2・1

- ③ 住民から出たアイデアを、必要性・時期・実施可能性・経費の4項目5段階で評価。あわせて誰が行うか、実施するうえでの課題も出し合う。その結果を分析したうえで取り組む内容を決定

課題 (アイデア)	必要性 地域にこれは必要、 やらないといけない	時期 できるだけ早く 取り組むべきかどうか	実施可能性 実際にできるかどうか	経費※ 人手や予算が どのくらいかかるか
	絶対必要 — まあまあ必要 — 少し必要	1年以内 — 3年以内 — 5年以内	容易 — 普通 — 困難	少ない — 多い
	[5-4-3-2-1]	[5-4-3-2-1]	[5-4-3-2-1]	[5-4-3-2-1]

※経費
5：10万円まで 4：100万円まで 3：500万まで 2：1000万円まで 1：1000万円以上

- ④ 出されたアイデアに、参加者全員がシールを貼る方法で投票。得票数が多いアイデアを関心の高いものとしてピックアップし、その具体的な進め方を話し合う。

8 | ワークショップでよくある意見

積極的な人、慎重な人、反対する人など、話し合いの中では様々な反応が示されます。まずは意見をしっかりと聞き、状況を見ながら臨機応変に対応しましょう。ワークショップでよく出る意見と対応例を紹介します。

地域ビジョン作成過程



自分たちには先がないのだから、
将来のことを言われても、生きているかさえ分からない…

➡ 例えば「あなたがいなくなった後、子どもや孫が地域に帰ってくるために、何かできることはないですか？」と視野を広げる。

いくら誘っても会に出てきてくれない人がいるが、どうしたらよいだろうか？
勝手に話し合いを進めたら、あとで文句を言われそうだが…

➡ 根気よく誘い続ける。会の内容は文書化して必ず伝え、情報を共有しておく。

地域には年寄りばかり。将来のことを考えて一体誰が実現するの？

➡ 現状の取り組みに対して敬意を表す。また、例えば「現状はそうかもしれませんが、未来の地域のあり方について、希望を語りませんか？」とポジティブな思考を促す。

ネガティブな意見を出す人はいつでも存在すると心得て、まずはポジティブな意見を持っている人と話をしていきます。

地域ビジョンの作成過程は、将来の夢や希望を語る場であると捉え、地域の魅力や資源について再確認しながら、前向きな雰囲気を醸成しましょう。

また、地区長や地域の中心的人物に参加してもらい、集落全体での取り組みとして住民に認識してもらうことも大切です。地区数が多い場合や対象地域が広い場合は、地区ごとに細かくワークショップを開催し、一人ひとりの意見を聞ける体制を作ったうえで、地域全体の合意形成につなげていきましょう。



もし補助金を使って10年後運営できなくなればどうなるのか？

- ➡ 運営する上で課題が生じれば、行政（県・市町村）が助言を行うことを説明する。

住民の総意は難しい。事業に関われない人の同意は困難だ

- ➡ 例えば「高齢者がサービスを利用する側の立場で事業に貢献することも、立派な参画になります」と説明する。

意見の対立などで会が膠着した場合の対処方法

- ➡ 休憩を入れる
- ➡ 話題を変える
- ➡ 冗談を言って場を和ませる
- ➡ 第三者の意見を聞く
- ➡ 対立しているグループ(意見)ごとに話し合ってもらい、その内容を書き出す(書きだした内容を見比べると、実は、どちらのグループも同じ考えを持っていた、という場合もある)



エピソード

会議で、高齢化でできないという意見が出た時、「できることをできる人ができる時にやれば良い」と言ってくれた80歳代の女性がいた。その一言で、会議の雰囲気が変わった。